星あかり

泉鏡花

青空文庫

もとより何故といふ理はないので、墓石の倒れたのを引摺寄せて、二ツばかり重ねて臺にした。

其の上に乘つて、雨戸の引合せの上の方を、ガタ〳〵動かして見たが、開きさうにもない。雨戸の中は、相州西鎌倉亂橋の妙長寺といふ、法華宗の寺の、本堂に隣つた八疊の、横に長い置床の附いた座敷で、向つて左手に、葛籠、革鞄などを置いた際に、山科といふ醫學生が、四六の借蚊帳を釣つて寢て居るのである。

聲を懸けて、戸を敲いて、開けておくれと言へば、何の造作はないのだけれども、止せ、と留めるのを肯かないで、墓原を夜中に徘徊するのは好心持のものだと、二ツ三ツ言爭つて出た、いまのさき、内で心張棒を構へたのは、自分を閉出したのだと思ふから、我慢にも恃むまい。……

冷い石塔に手を載せたり、濕臭い塔婆を掴んだり、花筒の腐水に星の映るのを覗いたり、漫歩をして居たが、藪が近く、蚊が酷いから、座敷の蚊帳が懷しくなつて、内へ入らうと思つたので、戸を開けようとすると閉出されたことに氣がついた。

それから墓石に乘つて推して見たが、原より然うすれば開くであらうといふ望があつたのではなく、唯居るよりもと、徒らに試みたばかりなのであつた。

何にもならないで、ばたりと力なく墓石から下りて、腕を拱き、差俯向いて、ぢつとして立

つて居ると、しつきりなしに蚊が集る。毒蟲が苦しいから、もつと樹立の少い、廣々〳〵とした、うるさくない處をと、寺の境内に氣がついたから、歩き出して、卵塔場の開戸から出て、本堂の前に行つた。

然まで大きくもない寺で、和尚と婆さんと二人で住む。門まで僅か三四間、左手は祠の前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹、鬼百合、夏菊など雜植の繁つた中に、向日葵の花は高く蓮の葉の如く押被さつて、何時の間にか星は隱れた。鼠色の空はどんよりとして、流るゝ雲も何にもない。なか〳〵氣が晴々しないから、一層海端へ行つて見ようと思つて、さて、ぶら〳〵。

門の左側に、井戸が一個。飲水ではないので、極めて鹽ツ辛いが、底は淺い、屈んでざぶ〳〵〳〵、さるぼうで汲み得らるゝ。石疊で穿下した合目には、此のあたりに産する何とかいふ蟹、甲良が黄色で、足の赤い、小さなのが數限なく群つて動いて居る。毎朝此の水で顔を洗ふ、一杯頭から浴びようとしたけれども、あんな蟹は、夜中に何をするか分らぬと思つてやめた。

門を出ると、右左、二畝ばかり慰みに植ゑた青田があつて、向う正面の畦中に、琴彈松といふのがある。一昨日の晩宵の口に、其の松のうらおもてに、ちら〳〵灯が見えたのを、海濱の別莊で花火を焚くのだといひ、否、狐火だともいつた。其の時は濡れたやうな眞黒な暗夜だつたから、其の灯で松の葉もすら〳〵と透通るやうに青く見えたが、今は、恰も曇つた一面

の銀泥に描いた墨繪のやうだと、熟と見ながら、敷石を蹈んだが、カラリ〳〵と日和下駄の音の冴えるのが耳に入つて、フと立留つた。

門外の道は、弓形に一條、ほの〳〵と白く、比企ヶ谷の山から由井ヶ濱の磯際まで、斜に鵲の橋を渡したやう也。

ハヤ浪の音が聞えて來た。

濱の方へ五六間進むと、土橋が一架、並の小さなのだけれども、滑川に架つたのだの、長谷の行合橋だのと、おなじ名に聞えた亂橋といふのである。

此の上で又た立停つて前途を見ながら、由井ヶ濱までは、未だ三町ばかりあると、つく〳〵〳〵然う考へた。三町は蓋し遠い道ではないが、身體も精神も共に太く疲れて居たからで。

しかし其まゝ素直に立つてるのが、餘り辛かつたから又た歩いた。

路の兩側しばらくのあひだ、人家が斷えては續いたが、いづれも寢靜まつて、白けた藁屋の中に、何家も何家も人の氣勢がせぬ。

其の寂寞を破る、跫音が高いので、夜更に里人の懷疑を受けはしないかといふ懸念から、誰も咎めはせぬのに、拔足、差足、音は立てまいと思ふほど、なほ下駄の響が胸を打つて、耳を貫く。

何か、自分は世の中の一切のものに、現在、恁く、悄然、夜露で重ツくるしい、白地の浴衣の、しほたれた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ濱へ通ずる砂道を辿ることを、見

られてはならぬ、知られてはならぬ、氣取られてはならぬといふやうな思であるのに、まあ！廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝつた杉の葉も、百姓屋の土間に据ゑてある粉挽臼も、皆目を以て、じろじろ睨めるやうで、身の置處ないまでに、右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おど〳〵して、其癖、驅け出さうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありツたけの遲さで、汗になりながら、人家のある處をすり抜けて、やう〳〵石地藏の立つ處。

ほツと息をすると、びよう〳〵と、頻に犬の吠えるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭も四頭も一齊に吠え立てるのは、丁ど前途の濱際に、また人家が七八軒、浴場、荒物屋など一廓になつて居る其あたり。彼處を通抜けねばならないと思ふと、今度は寒氣がした。我ながら、自分を怪むほどであるから、恐ろしく犬を憚つたものである。進まれもせず、引返せば再び石臼だの、松の葉だの、屋根にも廂にも睨まれる、あの、此上もない厭な思をしなければならぬの歟と、それもならず。靜と立つてると、天窓がふら〳〵、おしつけられるやうな、しめつけられるやうな、犇々と重いものでおされるやうな、切ない、堪らない氣がして、もはや！横に倒れようかと思つた。

處へ、荷車が一臺、前方から押寄せるが如くに動いて、來たのは頬被をした百姓である。これに夢が覺めたやうになつて、少し元氣がつく。

曳いて來たは空車で、青菜も、藁も乘つて居はしなかつたが、何故か、雪の下の朝市に行

くのであらうと見て取つたので、なるほど、星の消えたのも、空が淀んで居るのも、夜明に間のない所爲であらう。墓原へ出たのは十二時過、それから、あゝして、あゝして、と此處まで來た間のことを心に繰返して、大分の時間が經つたから。

と思ふ内に、車は自分の前、ものの二三間隔たる處から、左の山道の方へ曲つた。雪の下へ行くには、來て、自分と摺れ違つて後方へ通り拔けねばならないのに、と怪みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道の半あたりでツイ目のさきにあるやうな、大きな、鮮な形で、ありのまゝ衝と消えた。

今は最う、さつきから荷車が唯辷つてあるいて、少しも轆轤の音の聞えなかつたことも念頭に置かないで、早く此の懊惱を洗ひ流さうと、一直線に、夜明に間もないと考へたから、人憚らず足早に進んだ。荒物屋の軒下の薄暗い處に、斑犬が一頭、うしろ向に、長く伸びて寢て居たばかり、事なく着いたのは由井ヶ濱である。

碧水金砂、晝の趣とは違つて、靈山ヶ崎の突端と小坪の濱でおしまはした遠淺は、暗黒の色を帶び、伊豆の七島も見ゆるといふ蒼海原は、さゝ濁に濁つて、果なくおつかぶさつたやうに堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際は綿をば束ねたやうな白い波、波頭に泡を立てて、どうと寄せては、ざつと、おうやうに、重々しう、飜ると、ひた〳〵と押寄せるが如くに來る。これは、一秒に砂一粒、幾億萬年の後には、此の大陸を浸し盡さうとする處の水で、いまも、瞬間の後も、咄嗟のさきも、正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は餘

り大陸の一端が浪のために喰缺かれることの疾いのを、心細く感ずるばかりであつた。

妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先に来た時分とは濱が著しく縮まつて居る。町を離れてから浪打際まで、凡そ二百歩もあつた筈なのが、白砂に足を踏掛けたと思ふと、早や爪先が冷く浪のさきに觸れたので、晝間は鐵の鍋で煮上げたやうな砂が、皆ずぶ〳〵〳〵に濡れて、冷こく、宛然網の下を、水が潜つて寄せ來るやう、砂地に立つてても身體が搖ぎさうに思はれて、不安心でならぬから、浪が襲ふとすた〳〵と後へ退き、浪が返るとすた〳〵と前へ進んで、砂の上に唯一人やがて星一つない下に、果のない蒼海の浪に、あはれ果敢い、弱い、力のない、身體單個弄ばれて、刎返されて居るのだ、と心着いて悚然とした。

時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、氣も上ずつて蹌踉けかゝつた。手が、砂地に引上げてある難破船の、纔かに其形を留めて居る、三十石積と見覺えのある、其の舷にかゝつて、五寸釘をヒヤ〳〵と掴んで、また身震をした。下駄はさつきから砂地を驅ける内に、いつの間にか脱いでしまつて、跣足である。

何故かは知らぬが、此船にでも乘つて助からうと、片手を舷に添へて、あわたゞしく擦上らうとする、足が砂を離れて空にかゝり、胸が前屈みになつて、がつくり俯向いた目に、船底に銀のやうな水が溜つて居るのを見た。

思はずあツといつて失望した時、轟々轟といふ波の音。山を覆したやうに大畝が來たとばかりで、——跣足で一文字に引返したが、吐息もならず——寺の門を入ると、其處まで隙間も

なく追縋つた、灰汁を覆したやうな海は、自分の背から放れて去つた。

引き息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、屋根の上で、ガラ〳〵といふ響、瓦が殘らず飛上つて、舞立つて、亂合つて、打破れた音がしたので、はツと思ふと、目が眩んで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果てた、倒れさうな自分の體は、……夢中で、色の褪せた、天井の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗くなつた灯の影に、透かして蚊帳の裡を覗いた。

醫學生は肌脱で、うつむけに寢て、踏返した夜具の上へ、兩足を投懸けて眠つて居る。ト枕を並べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのばして、口を結んだ顏は、灯の片影になつて、一人すや〳〵と寢て居るのを、……一目見ると、其は自分であつたので、天窓から氷を浴びたやうに筋がしまつた。

ひたと冷い汗になつて、眼を※き、殺されるのであらうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、亂橋から由井ヶ濱をうろついて死にさうになつて歸つて來た自分の姿は、立つて、蚊帳に縋つては居なかつた。

　もののけはひを、夜毎の心持で考へると、まだ三時には間があつたので、最う最うあたまがおもいから、其まゝ默つて、母上の御名を念じた。——人は恁ういふことから氣が違ふのであらう。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻四」岩波書店
　　1941（昭和16）年3月15日第1刷発行
　　1986（昭和61）年12月3日第3刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：鈴木厚司
2003年5月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星あかり

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/